

# クレメンス・シャルシュミットの日本再訪

## 日本語学者の報告書より

横浜国立大学 小川誉子美

ogawayos@ynu. ac. jp

### 1. はじめに

西欧人による日本に関する記録や報告は、探検記や日記、また、学術書という形で16世紀ごろから世に送り出された。これらは、日本での実体験を記した報告や言語や自然科学の分野における学術的な報告であった。時代が下り19世紀に入ると、高等教育機関に東洋研究のポストが準備されたが、当時のいわゆる日本学者は、日本での実体験のない者がほとんどであった。ヨハン・ヨゼフ・ホフマン、レオン・ド・ロニー、アンテルモ・セベリーニ、カルロ・バレンチアーニらは、滞日経験を有することなく偉業を成し遂げた。20世紀に入ると、日本での滞在経験のある者が、高等教育機関の教壇に立つようになった。彼らの滞日年数は長期であり、その間、日本の学者らと学術交流を繰り広げた者もいた。ドイツを例にあげると、ベルリン大学の教壇に立った、ルドルフ・ランゲ、クレメンス・シャルシュミット、マーティン・ラミング、ハンブルク大学の教壇に立ったカール・フローレンツ、ヴィルヘルム・グンデルト、また、ライプチヒ大学のユハヌス・ユーパーシャル、ホルスト・ハミッチも、長期に渡る滞日経験があった<sup>1</sup>。この中で、最も滞日年数の長かったグンデルト（熊本第五高等学校、水戸高等学校）は通算30年、フローレンツ（東京帝国大学）は25年の年月を日本で過ごした。また、ユーパーシャル（京都帝国大学・甲南高等学校）は16年を日本で過ごしライプチヒ大学の教壇に立つが、戦争終結前に日本へ亡命し日本で生涯を閉じた。シャルシュミット（岡山第六高等学校）、ラミング（ロシア大使館・東京外国語学校）は、ともに10年近い年月を日本で過ごしている。彼らの多くは、いわゆるお雇い外国人として、帝国大学や旧制高校などでドイツ語、ドイツ文学を教え、宗教学、文学、言語学等を専門としていた。その中には、日本をフィールドとしたテーマで学位論文をまとめ、その研究・教育内容が日本での教え子たちによって活動内容が報告されてきた者、戦後大学に復帰を果たし、ヨーロッパの学会をリードした者など、日本においても活動内容が知られた者もいる。しかし、研究成果の報告を前に志半ばで、予期せずして悲劇的な人生の結末を迎え、その活動が十分に知られていない者もいる。

本稿では、日本学者らの日本訪問に関する報告書として、クレメンス・シャルシュミット（1887-1945）の「旅行・活動報告書」を紹介する<sup>2</sup>。この報告は、1930年に果たした念願の日本再訪に関するものである。日本滞在記や報告書からは、さまざまな事実が見えてくる。記した者の日本での足跡と学問的関心とともに、諸外国の日本学者と接点を持った日本の知識人の交友関係が見えてくる。また、海外の日本学者らの日本滞在記をひも解くことによって、彼らの日本観形成の一過程、すなわち、海外の日本研究の源流になんらかの影響を与えた出会いや事柄がどのようなものであったのかが浮かんでくるのである。これらは、今後の学術交流の在り方への示唆ともなりえよう。

このドイツ語による報告書を日本語訳で紹介する前に、シャルシュミットという日本学者の経歴につ

<sup>1</sup> ライプチヒ大学のヴェーデマイヤーに関しては確認されていない。

<sup>2</sup> ベルリン大学東洋語学校から4000マルク（学術・芸術・国民教育省より）、ドイツ学術緊急共同体から6000マルクの研究・活動旅費を受領していた。本活動報告は、これらの機関への報告として提出された。尚、旅行期間は、1930年8月4日（ドイツ出発）から翌年3月24日（帰国）の7ヶ月半である。本史料は、ベルリン連邦古文書館所蔵2入手した。IIW 76044.32, UI 16314.32, pp.70-97

いて、主として「日本語学者クレメンス・シャルシュミットへの追憶：50年前のソビエト軍ベルリン侵攻の際の死によせて」<sup>3</sup>（ヴァルター・アドラー）を参考にまとめる。

## 2. クレメンス・シャルシュミットの経歴

シャルシュミットは、ライプチヒ大学で、ドイツ語学と言語学を学んでいたが、師であるジーヴェス（言語学）の勧めで、1902年より岡山第六高等学校のドイツ語講師職に就いた。当時の外国人教員がそうであったように、経済的にも手厚い待遇を受け、国内旅行や武道を通じ日本文化や社会に触れる中で、当初の2年契約を延長し、1911年まで滞在をした。当時の最大の関心事は、漢文及び古典文語に精通することであったが、この知識は、帰国後、ライプチヒ大学の文化史世界史研究所に提出された、藤原明衡（989～1066）の書簡文範『雲州消息』の研究に生かされ、学位を得た。1914年の日本再訪の計画があったが、第一次世界大戦が勃発し、日独は敵対関係となったため、断念し、従軍した。しかし、任務中に大けがを負い、従軍不能となったため、ベルリン大学の東洋語研究所の軍事言語部局に送られた。1921年にはルドルフ・ランゲの後を継ぎ、講師（計画）として日本語を教えた。この間も、文字改革に関する関心は衰えることなく研究が継続された。1930年には、20年ぶりの日本再訪の機会を得、この関心は日本においても発表された。8カ月余りの滞在を経、帰国するとまもなく、ナチスが政権を掌握し、日独の政治的連携が強まるとともに、通訳として公式の政府間交渉や協議に動員されることになった。その間、テキスト『日本語における最重要漢字（Die wichtigsten chinesischen Zeichen im Japanischen）』を出版した。彼は、研究成果を発表する機会がなかったが、当時の多忙な生活に加え、彼自身の日本史に関する研究成果が、公式的に主張されていた独日側の見解との部分的対立があったからという理由によるという。政治問題をテーマにした調査研究の発表を控え、悲劇に遭遇した。戦争終結となる日、ソビエト兵士が彼の家に押し入った際に、殺害されたのである。彼は自分の研究を個別に保管し、一部は鉄の箱に保管していたのだが、これを守ろうとしたことが殺害の原因にもなったという。

最後に、彼の功績について、早期退職にあたって記された彼の功績評価から断片的ではあるが主要部分を引用する<sup>4</sup>。

「彼の悲劇的な死によって、彼の研究の多くは未完のまま、発表されずにある。第一には、既に述べた日本史と皇室史に関する研究であり、その他には、日本の宗教に関する調査、または、特に日本文化、その中でもとりわけ多色木版画の歴史に関する調査がある。」「外国語におけるドイツ大学教育の模範例を挙げるとすれば、まず第一に、シャルシュミット教授が第一次世界大戦の勃発から今日までベルリン大学で行ってきた日本語教育を挙げるべきであろう。」「地道に25年間も教鞭をとり、ルドルフ・ランゲの仕事を続行した。これに加えて、彼は、常時、ドイツ帝国当局によって重要な翻訳業務や通訳業務に重用され、極めて不慣れた過酷な環境下で業務を遂行することも頻繁にあった。彼の授業が際立っていたのは、彼が年齢、地位、能力に関係なく、自分の生徒たちに対して細やかな気配り、奥深さ、そして、親密な忍耐力をもって接したためであろう。」「特に健康上の理由から、次学期の教授活動の現場から退いたこの大学教師に、長年に渡り日本とドイツの架け橋を担ったその業績に対して言葉では言い尽くせないほどの賞賛と感謝を申し上げる。」

## 3. クレメンス・シャルシュミットの『旅行・活動報告』原文訳

本節では、1930年から1931年に及ぶ日本再訪に関する報告書「旅行・活動報告」の中で、往路の蒸気船

<sup>3</sup> Erinnerung an den Japanologen Clemens Scharschmidt: Zu seinem Tod vor 50 Jahren beim Einmarsch sowjetischer Truppen in Berlin, Walter Adler

<sup>4</sup> アドラーは、これをまとめたのは編集長のオットー・リヒターであろうと推測する。

諏訪丸内での交流（33日間）を除く、滞在中の報告の原文を日本語にて紹介する<sup>5</sup>。

ここからは、まずは年代記的に、1930年9月から1931年4月までの、日本と朝鮮における滞在と旅行について報告させて頂いて、この期間における活動と特別研究について、幾つかご報告させて頂きます。これについてご説明致しますが、私は日本でほとんど旅行していません。これはまず、財政的な理由によります。日本では旅行が高く付くのです。さらに、私はそれ以前にこの国のかなりの部分を見聞しておりましたので、この度はほとんどの期間を東京で過ごし、私にとって学術的な関係が強いところや、簡単に赴けるような都市や史跡を訪ねるに留めたのでした。

1930年9月13日の明け方に神戸到着。ここで私は、かつての生徒であり、今日是在神戸ドイツ領事館で働く三人に出迎えられました。同領事館で、私ははじめの二晩を過ごしました。友人たちのお蔭で、天に届かんとする摩天楼と、煙を吐く煙突に埋め尽くされた、完全に変わってしまった神戸の中で、再び簡単に見当をつけることができました。20数年前に神戸で知り合った旧友と会ったお蔭で、今と昔を結びつけたり、港湾産業都市としての神戸の著しい発展を理解したり、さしあたっての唾然とした印象を克服したりするのを助けられました。

商業と産業の集散地である大阪を経て、私はかつて非常に親しんだ、旧帝都である京都に参りました。この地は一主要な通りは居心地悪いほど現代化されはしましたが、大きな古い仏寺や邸宅等によって、相変わらず私を魅了し、研究のために尽きることのない題材を与えてくれるのでした。しかし、さしあたって私は、4日間という短い訪問で満足しなくてはなりません。というのも、名古屋で日本の友人が私を待っていていたためです。

台頭しつつある名古屋は、先頃100万都市になったことを誇りとし、港の拡大や、道路の拡張によって、また周囲地区の統合によって、自身の盛んな産業をさらに促進するために、目覚ましい発展を遂げています。これと結びつくように、文化的な事物に名誉欲が入り込み、これは目下のところ特に、新規建設された大学の拡張に集中しておりました。私はここで熱田神宮や、秀吉や清正の生誕地等々を訪ねました。ある日の午後に、私は日本三大河川の一つである木曾川に行きました。日本人がごく最近になって、この川の一部の風美を発見し、一般に触れやすくなったというので、これを見るために小舟での急流川下りに挑戦したのです。この観光部分は、現在では日本のライン河（ニッポン・ライン）と呼ばれています。

現在の日本のテンポを表すように、20年前であれば2、3日かかったであろうこの小旅行を、午後だけで快適に済ませることができます。電気によるローカル鉄道が、旅行者を今渡駅まで連れて行ってくれます。駅には既にバスが待機しており、川港まで旅行者を運んでくれます。川港からは、古風な小舟が旅行者を、すぐに始まる急流へと運びます。急流に身を任せて川を下ると、ちょうどいい時間に犬山に辿り着き、そこからは歴史的な古城を見学した後で電氣的なレール経路をとって、活気に溢れる名古屋へ急ぎ戻ることができるのです。このように、多くのものが昔のゆったりとした日本から消え失せ、輸入されてきた慌ただしさに席を譲らねばならなかったのです！

9月24日からは東京におりまして、ここに私は、中断はございましたが1931年3月25日まで留まりました。ドイツ人および日本人の旧友に多大な助けを受けまして、既に二日後には日本風の小さな家屋を賃貸し、既に四日後には入居できるほどに調度品（四分の三は日本風、四分の一はヨーロッパ風）を整えるに至りました。このお蔭で一実直な日本人女性の管理人に世話してもらい、それによってほぼ完全に、身体上の健康についての全く単純ではない不安から解放されて一、あつという間に体系的な仕事に取り掛かることができました。まずは、旧い関係を再び持ち、新しい関係を結ぶことにしました。閲覧が困難な特

<sup>5</sup> 原文は、A4 28行 全28頁の独文である。

定の収集物や図書館など、あるいは帝国議会、学校、大学等への立ち入り許可を手に入れるために、学術的な研究所や公的な部署と連絡をとったのです。

10月の初めから私は、尋常小学校、高等小学校および様々な大学で、体系的に授業見学を始めました。大学は、文句なしに日本全体の教育の中心である東京に約20校ありますが、帝国大学と文理科大学を除いて、例外なしに民間経営されています。このようにして、ほとんどの午前中は学校で過ごしました。午後は博物館や展示会、あるいは寺社見学、図書館での調べ物、頻繁な芝居見物に充てました（注記：芝居は4時に始まり、大体23時まで続きます）。

時折私は、日本語またはドイツ語で講演を行いました。

このような活動はほぼ1月末まで続きましたが、11月に日本の中央への、20日ほどの旅行で中断しました。この旅行の主目的は、世界最古の宝物館である、有名な奈良の正倉院の研究でした。正倉院は毎年11月1日から14日まで、宮内省の特別な許可があれば、見学することができます。日本における歴史学の第一人者であり、私の友人である黒板教授に<sup>6</sup>事細やかに支援して頂き、私は奈良で、より古い日本の文化史と8世紀の仏教を研究する、この上ない機会に恵まれました。宝物館である正倉院は、時代の激流にさらされていない築約1200年の木組み小屋ですが、昔の天皇の生活用の素晴らしい古物器具満載で、私に西暦750年頃の雅な日本人の生活を見せてくれました。黒板教授の仲介により、奈良および周辺の最古の仏教寺院や僧院（興福寺、東大寺、法隆寺等々）への、立ち入り許可を頂きました。これらの寺社の僧院長は、いつもであれば何重にも厳重に保管されている寺の宝を見せてくださったり、非公開の儀式に参加する機会まで与えてくれたりしました。

奈良春日の古い神道神社での三日間に亘る奉獻祭では、古来の手順により、また厳かな踊り「舞楽」やその他の実演により、過去が新たな命に目覚めておりました。また奈良の、内容豊かな帝国博物館は、特定の歴史時点を分かりやすい断面で見せてくれました。これら全ての研究は、奈良「高等学校」の二人の歴史学教授に案内してもらっての、古い陵墓と様々な史跡の訪問によって補足されました。この高等学校は私に、有難いことに車を用意して下さったのです。

成果の多かった奈良での8日間の後で、数日間大阪に滞在しました。大阪では、講演をするために招待を受けていたのです。出版の歴史についての私の研究に関して、100万部以上を出版するモンスター企業である毎日新聞社を、この地で訪ねました。同社は、日本の日刊新聞の、最も大きい二社の内の一つです。この新聞社が、現代的な原理によって印刷業務を合理化したことにより、同社の植字部門はあるシステムを得ました。このシステムは、包括的な、漢字の頻度についての統計的な処理に基づく、調査の成果であって、この調査は同時に、日本における書法改革の問題に関する私の論文のために、根本的に貢献するものでありました。同社の編集者や上級校正係との活発な意見交換をすると、出版の歴史について、および書法改革についての資料を、進んで与えてくれました。

11月17日から25日の期間を、私は京都で博物館、知恩院、三十三間堂、清水寺、銀閣寺、八坂神社等々の寺社、また天皇の居城である御所や二条離宮の訪問に費やしました。仏教天台宗の聖なる山である比叡山と、高野山の上に野趣あふれる形で広がる仏教真言宗の門前町と、神道最大の聖地である伊勢神宮が位置する山田の町々を旅行しました。高野山への巡礼は、なかなかの経験でした。高位の僧侶であり、当地の真言高野山大学の教授である人物—彼は私のかつて教え子でした—が、非常に特別に心を砕いて私を受け入れてくれ、また自分が筋金入りの仏徒であることを証明してくれました。というのも、時間が足りなかったのも、非常に残念なことにお受けは出来ませんでした。彼は自身の僧院に数週間滞在しませんか、と招待してくれたのです。

---

<sup>6</sup> 黒板勝美（1874-1946、古代史）。

自分の仕事の予定と、開催予定の講演についての特定の申し合わせ等により、私は東京に連絡を取りました。私は、どこを踏んでも歴史的な地を踏むことになる、この日本の一部から立ち去る必要があると考え、11月25日に首都に戻りました。それも丁度、26日の夜中に起きた激しい地震に間に合う形で。これは、1923年の大災害以来、最大の揺れでした。その後何週間は仕事に没頭し、その間ギブ・アンド・テイクがありながら、様々な大学や学術団体と緊密に連絡を取り合いました。計画していた日本の書物の購入や、日本の出版史に関する資料の収集、あるいは視覚資料や写真のまとめに多くの時間をかけました。これは私が、実体に関する私の講義に活気を与えるものとして、写真等の意義を長らく認めていたためです。学生たちに貴重な形で役立つと思われるピラ類の収集も、まとめようと試みました。

新しい年は、新たな課題を運んできました。国会が開かれ、私は約8日間、衆議院と貴族院との交渉に同伴する幸運を得ました。その間に結んだ関係により、私はこの国の活発な経済の知見を得ることもできました。このために私は、日本最大の木綿紡績・織物会社である鐘淵紡績株式会社のモデル工場等、一連の工場への立ち入り許可を得ました。その他、浅野セメント株式会社の最も現代的なセメント工場や、沖電気株式会社の工場、布工場等も視察しました。

しかし、もう東京に背を向けなければならない日が近づき、片付けなくてはならないことがまだ多くありました。専門学者との会談により、まだあちこちを見学したり、いろんな専門家を訪ねたり、新しい知遇を得たりとの刺激を与えられました。至る所で手助けしてもらい、私の滞在が出来る限り実りあるものとなるように、苦心してもらいました。しかし、提供された全ての機会を受けるには、時間と労力が十分ではなく、新しい印象を数カ月間に亘って集中的に受け続けると、最後には受容能力に一定の麻痺をきたしました。1931年3月25日に、残りの14日間を消耗の少ない日本の別の地で過ごすために、多くの東京の友人達と分かれることができた時には、ほっと一息ついたほどでした。

桃の花に埋れた美しい静岡で私は2日を過ごし、その後改めて名古屋と京都を訪れました。この地に私は、祇園寺の桜の花を再び楽しむのに、丁度良い時期にやって来ました。一日本の全ての華々しさに包まれて、また上機嫌な国民のあらゆる活動に触れて一私には日本との別れが、容易ならざるものとなったのです。古都奈良に最後の別れをし、神戸を経て、愛する大阪に向かいました。大阪は、私が20年前に9年過ごした地でありまして、これは人生が私に贈ってくれた内でも最も美しい年月なのです。千本もの記憶の糸と、十数人の旧友が私をこの地に留めようとしていました。しかしそこから身をもぎ離し、西に向けて急ぐ必要があったのです。日本での最後の滞在地である下関から、私は夜行の蒸気船で朝鮮に向かい、4月11日の朝には釜山に上陸しました。

古代日本にとっての、文化伝達者としての朝鮮の重要性を鑑みると、少なくとも、困難なく到達できる歴史的な場所を幾つか訪れたり、生活習慣の知見を得たり、この独特で好ましい民族の、物質的文化に関わったりする機会を逃してしまう訳にはゆきませんでした。私の最初の目的地は、釜山の北方約80kmの魅力溢れる丘陵地に位置しており、1500年前に基礎づけられた仏教寺院である仏国寺でした。仏国寺は、がっしりとした石垣と幅の広い階段の列により、かつての王国の礼拝建築を再現するものであり、この国の仏教の輝きを模写したものなのです。

かの地で私が得たこの印象は、翌朝まだ薄暗い内に、同寺の背後に数百メートル聳える丘に一新雪をかき分けつつ上り詰めた後で、さらに強まりました。ここで私は、有名な石窟庵の中で、足元に広がる日本海から上りつつある太陽が、石窟の内部に座する石仏（高さ3m）に一杯の光を浴びせるのを見て驚嘆しました。一方、石窟の壁に半浮き彫りされている、寄り掛かる姿の36体の童や仏神は、神秘的な薄闇の中でつましく控えているのです。この千年来の石像は、東アジアの芸術が産み出した最良のものに数えられます。

その後、私は最大加速して慶州に赴きました。この地で昼ごろ、私は博物館の館長と会う予定だったの

です。慶州は、典型的な朝鮮の地方都市であり、この都市が紀元前 57 年から紀元後 935 年まで、新羅王国の誉れ高き首都であったこと、また数世紀に亘って黄金時代を謳歌したことを、今日では感じさせません。有能な日本の先史学者と考古学者に、この地方の発掘についての学問には感謝の意を表すべきです。彼らは、朝鮮の古い歴史と、その日本との関係について、新たな資料を多くもたらしたのです。また、収獲物の大部分を、小さいながらも素晴らしいこの市の博物館の中で、模範的に展示しているのです。

慶州で二日弱の間に私が得たのは、圧倒的な印象でした。日本人博物館長の精通したガイドのお蔭で、先史的な収集の宝が息つき始め、またそれら収集の内では特に、陶磁器製の遺物が目を引きました。というのも、これらの遺物は、中国では出てこないタイプであり、日本のいわゆる弥生タイプと、完全に同一のもののように思われたためです。

朝鮮人の博物館助手であり素晴らしい日本語を話す人物が、数時間ドライブしながら、この旧都周辺のもっとも重要な史跡を見せてくれました。朝鮮の劇場を訪問したり、古風な朝鮮の宿屋で宿をとったりしましたが、これにより朝鮮民族の風習や習慣について印象深いイメージが得られました。この慌ただしい印象を、今日の首都であるソウル（京城）での数日間の滞在で拡大し、深めようと思っておりました。ここでも日本人の友人達—博物館長と大学教授数名—が、有難いことに短い時間の内に多くのものを見せてくれ、また分かりやすい情報を集めてくれました。

私が 4 月 17 日に、とうとうシベリア経由で帰路につかなくてはならなくなった時に、私の日本人の友人達は、朝鮮レストランで送別会を開くといって譲りませんでした。送別会では、日本語を話す二人の妓生が美しく、朝鮮の厨房が提供するものをサービスしてくれました。これは私の東アジア滞在の、最も心地良い思い出として残る締めくくりとなりました。シベリアとロシアを抜けてしばらく快適に乗車した後の、1931 年 4 月 28 日に私はベルリンに戻ってきました。

日本滞在の間の私の活動に関して申し上げれば—計画通りに準備した、大型の研究を除いて—、私自身が予見しなかった状況によって定められました。偶然なことに、私が日本に到着するほんの少し前に、日本語をラテン文字、つまり—日本人の呼び方で言えば—「ローマ字」で再現するための、二つの方式の支持者の間で激しい論争が再び突発したのです。文部省によって任命された混成の委員会は、近々ある審議をすることになっていました。この審議により、「旧ローマ字式」と、新しいいわゆる「日本式」のどちらかを、将来的に公認するかが決定されるのでした。

私自身この最新の問題について、純粋に学術的な観点から複数の論文で立場を表明してきましたし、決定的に古い方式の味方をしてきましたので、この方式を擁護する東京の団体である「ローマ字ひろめ会」<sup>7</sup>は、私の論文の内 1 本を日本語に訳したものを広め、私を自分たちの事案の、ある意味の重要証人として論拠に持ち出すことを得策だとみなしました。その結果として私は到着するやいなや争いに巻き込まれまして、厳しい敵と共に、すごい数の友人と好意的な支援者をもたらすことになりまして、いずれにしても私の滞在に特別点を加え、さらに刺激的なものにしてくれました。私が東京に到着して 3 日目には、既に報知新聞社の代表者が我が家に現れ、長時間に及ぶインタビューをした後で、読者の多い自社新聞に、ローマ字問題に対する私の態度についての長い記事を載せました。これは反対陣営に対する、ささやかな文学的争いの幕開けとなりました。様々な新聞や雑誌は、私が居るとこの問題を改めて取り上げ、—自身の立場によって—この分野に通じた外国人の超党派性を認めるか、あるいはこの全く国内的な問題に感情移入する能力を否認したのです。

ローマ字ひろめ会が私と連絡をとるのも時間の問題でした。私は「ローマ字問題」に関して、ヨーロッパ人の観点から、日本語で講演して欲しいと頼まれました。この講演は 1930 年 10 月 23 日に、東京の素晴

<sup>7</sup> ヘボン式か日本式を採用するかで対立していたローマ字論者の団結をはかるべく 1905 年に設立された組織。後、ヘボン式を採用し、日本式を主張するメンバーが離れていった。

らしいクラブハウスである交詢社に招待された折に、立派な数々の著名な日本人の前で行いました。かれらは、その後行われた議論に活発に参加しました。そのような機会に結んだ関係に、私は後に何度も感謝することになりました。

日本で生活するヨーロッパ人サークルにおいても、ローマ字問題に寄せる関心が改めて呼び覚まされ、そのため私は一大阪・神戸日独協会の招待に続いて、1930年11月14日に大阪にて「ローマ字問題の国際的意味」に関して話さなくてはなりません。また、東京の東アジア会の要請で、「日本の書法改革の文化問題」についても話しました。この二つの講演については、反対陣営も一連の代表者を派遣してきました、私は相手側の主席闘牛士であり、貴族院議員である田中館教授博士閣下と二度までも鏝迫り合いをする機会を得たのです。

その他の様々な側面から私に寄せられた、講演をして欲しいという招待には、部分的にしか応じられませんでした。何故なら、私にはそれをする時間も労力もなかったためです。というのも日本人は少なくとも量的な関係について一、講演者に高い要求をするもので、2時間より短いような講演を短すぎるとみなすのです。講演がそのようであれば、引き続いてさらに数時間の議論が日本語で行われるため、私のように世界大戦で重大な難聴を被った者にとりましては、これは純粋に肉体的に疲れることでありまして、私はその後少なくとも一日は仕事ができない状態になるのです。こういった理由から、私はしばしば日本語では短いスピーチをするように苦心する必要がありました。例えば、見学させて貰った様々な学校で学生に話しかける際や、招待された折などです。それより規模の大きい講演の中で、私はとりわけ以下のものを強調しようと思えます

- ・1930年10月27日、東京青山における国民学校・尋常学校教師集会にて、「古い日本と新しい日本」について、日本語講演。
- ・1930年12月12日、東京帝国大学独文ゼミのメンバーおよびゲストの前にて、「現代のドイツの学生と、その問題」について、ドイツ語講演。その後日本語にて2時間の議論。
- ・1931年2月10日、雑誌「キング」主催の食事に、「ヨーロッパ外国語による、日本語の過剰訂正」について日本語講演。この講演は速記にとられ、大部分がキング誌（1931年5月号）<sup>8</sup>内で出版されました。

私が日本での自分の課題だと考えておりましたのは、以下の事項について見通しを得ることでした

1. 日本における、国文献の現状
2. 日本の歴史学および先史学の進歩
3. 最近20年間の優れた文献

このうち、最初の二つは、協力的な二名の旧友の厚意によって根本的に容易となりました。それは国立文理科大学の国文献教授である保科博士<sup>9</sup>、上述の東京帝国大学の黒板教授のお二人で、彼らの仲介により、多大な数の専門学者と触れ合うことができました。先史学の分野では、私は隣人であり親切な公爵である大山氏<sup>10</sup>よりも、事情に詳しい先生を見つけることは出来ませんでした。大山氏は元帥陸軍大将の御子息です。大山氏は、比類のないほど完全な作業組織—博物館、図書館、助手、技術者—を私に用立てて下さっただけでなく、氏自身がそういったお方でした。氏のご指導により、私は貝塚の発掘に参加させてもらいましたし、氏は、多数の先史的な繊細な事物について、実践によって私の目を開いてくれました。

優れた文献のごく重要な出版物についてだけでなく、あらゆる分野について最良の方策として、東京の神田地区にある数多くの書店や古物商方面を探しました。日本の書店では、本好きにとっては非常に居心

<sup>8</sup> 講談社刊、1924年から1957年まで発行。

<sup>9</sup> 保科孝一（1872～1955）。国語国字問題調査のため、1911年渡欧。

<sup>10</sup> 大山柏（1889-1969、考古学）。史前学研究所設立（東京都渋谷区、1945年東京大空襲で全焼）、雑誌刊行。

地良い習慣がありまして、どの書店でも、またどの古物商でも、好きな本をどれでも自分で取り出して、それを買う義務を負わずに、好きなだけ立ち読みできるのです。その際に、買い手にもたらされる不利益といえば、資金のない知識人から十分に「懐をあてに」されることで、しかしながらこれは一このように多くの書店が立ち並んでいることが示す通り一、再び埋め合せされるものに違いありません。何故なら、本を立ち読みした訪問客はしばしば、心ならずも買う気になってしまうためです。私にとりましては、いずれにしてもこのような形で—20年ぶりの日本で—、数多くの機会が与えられました。これは、カタログが味も素っ気もないから、というだけではなく、この間に私の興味のある様々な文献分野で出版された全てを、実物を手にとりて自分で見たためです。

私を得た印象は時間がたつごとに強まりましたが、ただただ圧倒的なものでした。これほど膨大な数の新刊書が毎年毎年書籍市場に投入されているとは、またその内のほんの一部しかドイツに漏れてこなかったとは、全然想像しませんでした。増大する驚きと結びついたのは、数十年に亘って継母のように携わってきた、オリエンタル言語ゼミの図書室を補充するという私の計画は実行できない、という落胆した感情でした。というのも、僅か836ライヒマルク=400円という金額は、私が『日本語分類語彙集』の最後の一冊として書籍購入に使えるものでしたが、非常に節約して選んでも、我がゼミの書籍や他の教材の最低必要量をカバーするには到底十分ではなかったのです。

しかし、私は、オリエンタル言語ゼミのために書籍視覚教材を慎重に選び、調達するという、恐らくもう一度は得られない機会をみすみす無為に諦めてしまう気はありませんでしたので、手段やつてを介して対策を考えたのです。私は自助手段を選びました。何度も苦心が徒労に終わった後で、東京のドイツ人サークルおよび日本人サークルに、私の努力について理解してもらうことができました。その結果、総額700円、つまり当時のレートで約1400ライヒスマルクを、視覚資料、教材および書籍を調達するために委ねて下さったのです。これらは、オリエンタル言語ゼミの日本語クラスの参考図書をなすことになりました。この寄付に参加下さいましたのは、フォレチュ大使閣下以下、東京在住の以下のドイツ人でした：アーレンス& Co. 社のヘルマン・ボッシュ氏、ツァイス社の社長クー氏、ライボルト商館のマイスナー氏、富士電機社のモーア氏、シュミット商店オーナー、シュミット氏、ならびに、私の友人であります東京ドイツ文化会館の友枝教授が、同館の日本人サークルから300円の寄付を募ってくれました。

寛容な寄進者の気前のよさは、酷く商況が悪かった当時の東京よりも増しておりました。全寄進者には、私が故郷に戻ってきた後でゼミからの公式な謝辞をお送り致しました。

さて、私が見えることになりました400円および700円という金額を、私の力の及ぶ限り遣り繰りして、オリエンタル言語ゼミと私の学生の興味に出来る限り大きい作用を及ぼせるようにするだけとなりました。私は出来る限りに、多岐に渡る古物の多彩を極める物件を最大活用しましたが、いくらか満足の行く結果にしか辿りつけませんでした。勿論これは私にとって、実に時間をとられる方法でした。そのため、しばらくして私は書籍競売の常連となりまして、夜になると、いわゆる夜店をしばしば訪問しました。夜店では、東京の往来の多い道路で、歳の市さながらに夜の19時から24時に、考えられる全てのものを売っておりまして、それらの中には優れた文献や学術文献が数多くあるのです。こうして、少し苦心しましたが手にした千冊、二千冊の書籍の中から、非常に有用なものを店頭価格よりもずっと安く手に入れることができました。ただし勿論様々な方面にむけて、新しい書籍を購入することによって、これを体系的に補足する必要はございました。

このやり方により、ゼミ図書室に既蔵の日本語書物のうち、ポコッと抜けておりました隙間が『分類語彙集』によって400円で充填され、また寄付して頂いた700円の大部分を、日本語クラスの基礎づけのために、特別な性格を持つ参考図書に使わせて頂きました。この参考図書は一義的に、基本的に独学で特殊

分野を実習したり、一般的に勉強を続けることをしたい上級学生のための教授図書室であります。研究者のために特定される、純粋に学術的な著作については、そのため代表的なものを僅かな数しか揃えておりません。この種の書籍を調達することは、日本研究所と国立図書館の課題であります。ベルリンに足りないものは、日本語を導入するための補助金から、利用されにくい学術的組織へ架かる橋です。この「ミッシング・リンク」を提供することは、大学教育の課題に属するものでありましようし、そのために私は、そのような実用的な作業図書館のための基礎を築くことを試みたのです。私は、この教育学的に極めて価値の高い資料を学生に利用出来るようにするために、またこれを後に拡大するために苦心しておりますので、上級の当局側よりご厚意をお寄せ頂くことを希望しております。書籍の選択につきましては、一義的に、言語的、文学的、歴史的、および文化史的研究を考慮してきました。とりわけより昔の日本語文献にとって、特に好都合な状況でした。現代の日本人にとっても、自身の昔の文献の研究がどんどん難しさを増しておりますので、日本の学生のために、古典の理解を助けようとする文献が成立しているのです。これらのコメントや現代日本語への翻訳といったものは、ヨーロッパ人にとっては勿論、計り知れない程の価値を持ちます。そのためこの種の独学に特化した書籍を、私は多数調達したのでした。歴史部門につきましては、特別に慎重に選択しました。これは国民学校から学術研究修了までに至る、日本の歴史の教授課程をなすものです。この部門に編入される日本の文化史、宗教の歴史、憲法史、日本の出版史に関する著作は、純粋に学術的な著作であり、私が自分の特別調査のために必要とするもので、また数あるベルリンの図書館に所蔵されていないものです。

まとめますと、この小型の専門図書室は約 600 冊の蔵書を有し、このために僅か 450 円を支出しただけです。残りの寄付金である約 250 円のうちのほぼ三分の二は、以下のものの購入に充てました：

歴史、地理、経済等の講義用の大型視覚資料 (75×55cm) 192 点

写真 250 点

言語授業のためのレコード 28 点

その一方で三分の一は、製本作業やこれに類するものに使いました。珍事として述べておきますが、東京の小柄の製本職人は 117 冊の総クロス装を 46 円で製本してくれました。また表具職人は、大型の図 192 点を 38 円 40 銭で亜麻布に張ってくれました。ここから、正しい出所さえ知っていれば、今日でも日本では一定の手作業を安価に手に入れられることがお分かりでしょう。

私の特別研究に関しては、この報告書では短くまとめるに留めます。といいますが、そう遠くない時期に、この研究の成果となる 1、2 本の論文を提出したいと思っているためです。日本で片付けた予備作業は、東京の数々の図書館で行ったものです。これらの図書館ではしかし、今日でもまだ多くの地域で、1923 年の地震災害の爪痕が認められました。

専門文献やその他の問題に助言を頂いて、感謝申し上げる全ての学者の名を挙げることは、私にはほとんど不可能であると思います。しかしながら、少なくともお二方の名前を述べることをおろそかにするつもりはございません。両者は多数の文献等によって、日本の印刷史についての私の研究を根本的に支援して下さいました。東京帝国大学新聞学の小野秀雄教授は、ご自身が偶然にも 1931 年 1 月に新しい壮大な大学講堂にて開催された、小規模の印刷展示会にて、私に新たなものを多く提供して下さいました。また、作家である宮武骸骨氏が基礎をつくり世話しておられた、明治時代の新聞雑誌収集 (明治新聞雑誌文庫) も、多くのものを提供してくれました。同文庫は独自の、半民の企業として東京帝国大学内で保護を受けております。この文庫は私にとって、純粋に無尽蔵の宝庫となりました。その宝を、残念ながら私は短い期間の中で私が望んでおりましたほどには活用できませんでした。骸骨氏は、日本の印刷史についてのつましくも典型的な文書数点を、日本で収集するのを助けて下さいました。

まとめとしまして、この度の旅行が私にとって、多岐に渡る関係において得るものが豊かでありました

ことを、最後に述べたいと思います。またこのために、この度の旅を可能にしてくださいました各所に改めて御礼を申し上げます。

シュターンスドルフ・ヴェストにて、

1932年6月16日

クレメンス・シャルシュミット

#### **参考文献**

Walter ADLER(1995) Erinnerungen an den Japanologen Clemens Scharschmidt: Zu seinem TOD 50 Jahren beim Einmarsch sowjetischer Truppen in Berlin, NOAG157-158, pp.7-16

小川誉子美 (2005) 「黎明期の日本語・日本学講座を担当したドイツ人講師と講座支援の背景に関する考察—対外広報活動としての日本語講座という観点から—」『日独文化交流史研究』第8号日本独学史学会 pp.79-94

小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景—』 風間書房